

イスラエル アンベールド Vol.1 「オリーブ山」



英語版オリジナル 2017年4月1日公開 : Israel Unveiled Vol.1: Mt. Olives

<https://youtu.be/IYfchbAvWV8>

メッセージ by アミール・ツアルファティ

Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

オリーブ山は、イエスの時代、また、それ以前の第一神殿時代を通して、山全体や山頂に、オリーブの木が何千本も立っていたところから、そう呼ばれるようになりました。オリーブの木が植えられていたのは、その実から油を採るという目的のためだけでした。当時はオリーブの実を食べる習慣はなく、オリーブを塩漬けにするというのは、数百年前に始まったばかりです。オリーブにはいくつかの用途がありました。当時は、オリーブ油は、人を清める聖油として使われたり、皮膚や髪の手入れのために使われたり、また、ランプを灯す燃油としても、料理の調味料としても使われていました。

オリーブ山は山地になっていて、基本的には、今、私の背後にあるエルサレムをその東側にある砂漠から守っています。この山地は、北側ははるか、今日はスコープス山と呼ばれる、ティトゥス・ウェスパシアヌスが、紀元70年にエルサレムを破壊する直前に、そこからエルサレムを眺望した場所から、オリーブ山と呼ばれる中心部があり、最南端は、スキヤンダルの丘と呼ばれ、ソロモンが外国から娶った妻たちに、異国の神々のための祭壇や高き所を築かせたと信じられている場所に及びます。今日、オリーブ山の山腹で起こっていることの大半は、その下方にある谷に、直接関係しています。

私の背後にあるキドロンの谷は、聖書ではヨシャパテの谷としても知られています。ヨシャパテとはヘブル語で「神が裁かれる」という意味で、古代のみならず、今後の観点からも、間違いなく注目に値する場所となっています。聖書には、ヨエル書3章1～3節にこう書かれています。

「見よ。わたしがユダとエルサレムの捕われ人を返す、その日、その時、わたしはすべての国民を集め、彼らをヨシャパテの谷に連れ下り、その所で、彼らがわたしの民、わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで彼らをさばく。(ヨエル書3:1-2)」

世界中の国々の民は、この谷に下っていき、裁きを受けなければなりません。その際、彼らがイエスを信じたか否かとか、彼らが善人であったか否かは問題にならず、ただ一つのこと問われます。それは、彼らがイスラエルの民、およびイスラエルの地に対して、何をしたかということです。明らかに、彼らは、神にとって非常に大切な国、神が「わたしのひとみ」と呼ぶ国に対して自分たちが行ったことのために、高い代償を払うこととなります。何千人ものユダヤ人が、オリーブ山の山腹に埋葬されることを願ったのはこのためです。復活の日に、神殿の丘に顔を向け、イスラエルの国とイスラエルの地に対して、非常に多くの悪を行った国々への、神の裁きを目撃するためです。人々は、この地中深くに埋められています。ユダヤ人は死者を火葬しません。死者は、墓石の下に地下深く埋葬されています。皆、復活の時に、顔が神殿の丘に向くように埋められています。その裁きの場所に顔が向くように。彼らは皆、地中に埋められています。その墓石には、彼らの名前と地上で生きた年月が記されています。私たちはこのような墓地を訪れると、敬意のしるしとして、墓石の上に小さな石を乗せて行きます。ちょうどイスラエルの民が荒野を旅していた時にしていたように。彼らは、誰かが死ぬと、適切な墓地に埋めて献花するようなことは出来なかったため、地面に穴を掘り、死者を埋め、土をかぶせ、岩や石を山積みにして、死体が動物に食べられたりしないようにしました。そして、石の山のそばを通る人は誰でも、その埋葬の場所を保護するために、敬意から、石をもう一つ付け加えるのが常でした。

オリーブ山はまた、王たちが油注ぎを受ける場所でもありました。また、ここは、数百年ごとに、赤い雌牛が新しく現れ、またその灰が必要であった時には、それがほふられた場所でもありました。そして、一年に一度の贖罪の日に、大祭司が贖罪の山羊を取り、あの東の門を通過して、キドロンの谷を横切る木の橋を渡り、汚れた墓地を迂回するか乗り越えるかして、その山羊をオリーブ山の頂から荒野へと放つために、この場所に来るのでした。ユダヤのミシュナやタルムードによると、その山羊の首に巻かれた赤い紐は、祭司が立っていた場所にあった木の枝に結ばれていた赤い紐とともに、その贖罪の山羊が荒野で死ぬと同時に、奇跡的に白くなったと言われています。興味深いことに、ユダヤのタルムードによると、神殿が破壊されるおよそ40年前に、その赤い紐は白くならなくなったそうです。何が、あるいは誰がいけにえとなることによって、その贖罪の山羊の死が意味のないものとなったのでしょうか。

私の背後に、東の門をご覧いただけると思っています。今日ある東の門は、約480年前にトルコによって再建されたものです。イエスの時代にあった元来の東の門は、その真下に埋められています。イスラム教徒たちはその門を塞ぎ、そのすぐ下にイスラムの墓地を置いてその土を汚し、ユダヤ人メシヤが戻ってきて、その門から市内に入って来るのを防ごうとしたと言っています。おもしろいことに、聖書は、その町の門は瓦礫の下に沈むと予告していました。哀歌2章9節を読むと、「その城門も地にめり込み、」とあります。ですから、元来の門が、現在ある門の下にあるという事実は、ずっと昔にすでに予告されていたのです。イエスが戻って来られる時、そしてゼカリヤ書12章と14章で描写されているあの地震が起こるとき、聖書には、その神殿の丘にあるものは何一つ残されることがないと書かれています。その地震による破壊は大変なもので、オリーブ山が真二つに分けられ、そこに新しく谷が作られることとなります。そして、聖書によると、元来の門が上げられることとなります。詩篇24章を読むと、こう書いてあります。

「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王がはいって来られる。栄光の王とは、だれか。強く、力ある主。戦いに力ある主。門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王がはいって来られる。その栄光の王とはだれか。万軍の主。これぞ、栄光の王。(詩篇24:7-10)」

戦士として、馬に乗ってこの場所に来られ、ついには、埋もれた門が上げられた所から入られるという、イエスの再臨の約束は、確実なものなのです。私たちが今日見ているものは、一時的なものにすぎません。

オリーブ山はまた、少なくとも1年に3度、大祭日に、ガリラヤからエルサレムまで来たユダヤ人たちが、皆集まる場所でもありました。大祭日とは、過越しの祭り、五旬節、仮庵の祭りです。ガリラヤ出身者たちが、オリーブ山に集まるのはとても自然なことでした。単純に、そこが、ガリラヤからヨルダン溪谷を通過する長旅の最終地点だったからです。エリコから東側を下り、オリーブ山の頂きへと登りながら、彼らは都上りの歌を歌いました。そして山頂に立って初めて、彼らは神殿を目にすることが出来たのでした。彼らはそこに落ち着き、そこかしこにテントを張って、その祭日の期間中、オリーブ山の頂にとどまっていました。イエスは、これらの人々の間でもよく知られていました。ですから、イエスが市内に入ってきたとき、すべての人々が、大いなる喜びと期待をもって歓迎したのでした。あの裏切りの起こった夜を除いては、イエスがエルサレムの城壁の内側に泊まったことは一度もありませんでした。イエスは毎日、オリーブ山の頂上からキドロンへ下って行って、その谷を渡り、神殿のあった区域に入り、その日を過ごす、オリーブ山の頂に戻ってきて、ベタニヤにあったマリア、マルタ、ラザロの家に入って夜を過ごしました。イエスはユダヤの祭日の期間中にしか、エルサレムには来られませんでした。イエスが成長された場所であり、自らの故郷とされた場所はガリラヤでした。エルサレムは、イエスの最後の旅のための場所、十字架にかけられ、よみがえり、昇天するという、彼の定めのための場所でした。エルサレムは非常に宗教的で、あまりにも偽善が横行していたために、イエスには我慢ならなかったようです。

聖書には、イエスが戻って来られると、状況は完全に異なったものになると書かれています。イエスは統治されるのです。この町から支配されるのです。しかし、それは人々が悔い改めて、イエスを主、王、メシヤ、贖い主として受け入れた後のことです。聖書には、イエスご自身が、ご自分について預言者の書に書か

れていることはすべて成就されなければならないと約束された、と書かれています。ですから、ダニエル書第9章において、預言者ダニエルが、メシヤがエルサレムに入ると予告した、まさにその日、すなわち、当時のペルシャ王によってエルサレム城壁の建て直しの法令が下されてから、正確に17万3800日後のその日に、イエスはろばに乗ってエルサレムに入城されました。イエスはゼカリヤ書9章9節にある預言者ゼカリヤの言葉を成就されました。

「…見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。(ゼカリヤ書9:9)」

イエスは、イスラエルの預言者たちによって語られた、メシヤの到来に関する、すべての言葉を成就しなければなりません。イエスは、ゼカリヤが預言したとおりに、ろばに乗って入城され、この辺り一帯にいた多くのガリラヤ出身のユダヤ人たちを中心に、エルサレムの住民や、過越しの祭りの期間中にここを訪れていた人たちにも、多大な敬意と期待のうちに迎えられました。パリサイ人たちは、一般のユダヤ人巡礼者たちが、イエスを大いに称賛しているのを見過ごすことができませんでした。イエスは、結局のところ、メシヤ、また贖い主として受け入れられることなく、十字架へと引いて行かれました。

ユダヤ人は、今もなお、メシヤが来るのを大いに期待しながら暮らしています。彼らは、メシヤが今にも現れようとしていると、本気で信じています。たとえその現れが遅れても、彼らは待ち続けます。イエスはエルサレムに來られました、エルサレムにはその用意がありませんでした。それで、イエスが、「エルサレムよ、おまえは神の訪れの時を見逃した」、と言われたのも当然説明がつくのです。

「訪れ」とは何でしょうか。「訪れ」というのは、誰かが短い期間やって来て、その後去っていくことです。それが「訪れ」です。ユダヤ人、このエルサレムの町は、イザヤ書53章に書かれているように、メシヤがまず、主の苦難のしもべとして、過越しの子羊として、世の罪を負う子羊として來なければならず、彼がほふられなければならず、彼が全世界の苦痛と、罪と、咎を負わなければならないという概念を見落としたのです。私たちはみな、さまよい、おのおの、自分勝手な道に向かって行きました。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせたのです。

ユダヤ教には公認の信条というものがありません。ユダヤ教の信条は、トーラーのようなユダヤ教の聖典の朗読を通して、信仰者によって明確に示され、守られています。しかし、十二世紀の偉大なラビであった、愛称ランバンで知られるマイモニデスは、すべてのユダヤ人が信じるべきだとする13の信仰の原則をまとめました。これらの信条は、ユダヤ教の信仰を適切に表すものとして、幅広く受け入れられてきました。そして、それらは今日でもユダヤ教の祈祷書に含まれています。

1. 神は存在する
2. 神は一つで唯一無二である
3. 神は無形である、すなわち、物質から成っていない
4. 神は永遠である
5. 祈りは神にのみ向けられるものである
6. 預言者は真理を語った
7. モーセは最も偉大な預言者であった
8. 成文律法と口伝律法はモーセに与えられた
9. トーラーは唯一無二である
10. 神は人の思いと行いを知っている
11. 神は善人に報いを与え、悪人を罰する
12. メシヤは来る
13. 死者は復活する

これらは、大体において間違っていないと思います。彼らは本当にメシヤが来ると信じています。そして彼らは皆、メシヤが来ることを全き信仰をもって信じており、メシヤの来るのが遅くなっても、彼が来るのを日々待ち続ける、と言います。ユダヤ人たちは、メシヤの到来を、日々、待っているのです。彼らは、メシヤが来るのは遅くなるかもしれないと、本気で考え、メシヤは予定通りには来ないかもしれないが、自分たちは待っているべきだと、本気で考えています。

ユダヤ人は、間違いなく、メシヤの訪れを見逃してしまいました。エルサレムは、豊かな平和と繁栄に恵まれ、宗教の霊も蔓延し、人々は自分自身に満足し、良い気分になっていました。それが、イエスがロバに乗って踏み入れた現実でした。それは、非常に高慢で、傲慢であった町でした。それが、葉を茂らせていても、その下には全く実を成らせていなかったイチジクの実態なのです。聖書によると、イエスはロバに乗って来て、その平和的で美しい町に入りました。けれどもイエスは立ち止まり、その都のために泣かれました。それで、カトリック僧アントニオ・バルルツィが、二十世紀にこの山の山腹に建てた、このドミヌス・フレヴィ教会の形も説明されます。イエスはエルサレムのために泣かれました。イエスには、この町の不信の結果として訪れようとしている破壊を見ることができました。けれども、この町の人々は、完全に盲目にされ、完全に慢心し、宗教が答えであると確信し、自分たちの罪からの救いと、その救い主の必要性を信じる真の信仰を持っていませんでした。

先に言ったように、イエスはエルサレムに入って、涙を流されました。ルカが第19章41節で言っているように、「都を見られたイエスは、その都のために泣」かれました。イエスは、ゼカリヤが第9章9節で言ったように、ろばに乗っておられました。ユダヤの伝統でも、中東一般の伝統でも、王は、平和のうちに来るときは、ろばに乗っていました。そして戦のために来るときは、馬に乗っていました。ですから、イエスがろばに乗って入って来られたのは、戦のためではありませんでした。聖書には、ヨハネの福音書3章17節および同12章47節において、人の子は世をさばくためではなく、世を救うために来たと書かれています。イエスの第一回目の来臨はさばきのためでもなく、戦のためでもなく、ここに彼の王座を永遠に確立するためでもなく、その完璧な犠牲、つまり完璧な子羊の完璧な血潮によって、彼らを救うためでした。必ずしもユダヤ人ではなくても、宗教的になって、主の訪れの時を見逃すことはありえます。ヒンドゥー教であれ、イスラム教であれ、ローマ・カトリック教であれ、ギリシャ正教であれ、どんな宗教であれ、やはり、主の訪れを見逃してしまうのです。

イエスは、彼らを罪から救うためにイスラエルに来られました。しかし、彼らはイエスを受け入れませんでした。

「この方はご自分のくんに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった（ヨハネの福音書1:11）」

イエスは、世をその罪から救うために、世に来られたのです。イエスは私たちが砕かれ、空にされることを望んでおられます。イエスは、私たちが、自らを生きた供え物としてささげることを望んでおられます。イエスは私たちが、自分たちには救い主が必要であること、自分たちの力ではどうにもならないことを理解するのを望んでおられます。律法は完全でした。ユダヤ人たち自身が、他に律法はないと言っています。しかし、どんな人にも、律法を成就することは決してできないのです。それが完全であるがために、またそれが聖なるものであるがために、そして人間が完全ではなく、聖なるものではないために。

私たちには救い主が必要なのです。私たちには贖い主が必要なのです。私たちには、私たちが神のもとへ引き戻してくれる人が必要なのです。イエスは、私たちがご自身だけを信じることを望んでおられます。イエスだけです。救われるために他にしなければならぬことはありません。人は信仰によってのみ救われます。それはイエス・キリストによってのみであり、他のどんな名前にもありません。

主の訪れの時を見逃さないでください。イエスは救うために来られました。イエスは赦すために来られました。イエスはろばに乗られました。イエスは平和のうちに来られました。今が、あなたがそれを理解し、それに基づいて行動を起こすときです。今なら、あなたは平安のうちにイエスを信じ、永遠のいのちを享受

することができます。主イエスが戻って来られる時が来ます。イエスはこの町に戻って来られます。馬に乗ってこの地上に来られます。イエスは、いくさびととして来られます。イエスは、ご自身が戻って来られる時にこの地上にあるすべての敵、すべての邪悪、すべての不正を、御口の息をもって破壊されます。その日、あなたはどちらの側にいることを望みますか。馬に乗ってイエスの後に従い、まさにこの場所にイエスと共に来るのか、それとも、この世の君によって完全に盲目にされて、ここでこの世が経験しようとしている大患難によって完全に傷つけられ、後に、主の日、主の大いなる日の、このひどい戦いにおいて死ぬことになるのか。ユダヤ人たちが、メシヤの来るのが遅れていると思っているとしても、一つ私に言えることは、ペテロの手紙第二3章8～9節に次のように書いてあることです。

「しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(ペテロの手紙第二3:8-9)」

主は今日、あなたに語っておられます。主はあなたが滅びることを望んでおられません。あなたが悔い改めることを望んでおられます。主は来られます。そしてあなたを救ってくださいます。